

手品師がアトラクションで歓迎

第二十三回東部管内組合員交流会が管内組合員五十四名の参加のもとに盛大に開催された。

今回の担当幹事は三原・世羅地区が担当され、司会の内海利彦さんの開会挨拶に続き、主催する東部活性化連絡協議会の山本芳紀会長は挨拶で「例年通り開催できて感謝します。酪農情勢の厳しい中ですが、本日はゆつくり歓談して頂き、明日への活力として頂きたい」と述べられた。地元代表の新舎和久さんは「忙しい中、多数集まって頂いた。こうして歴史ある交流会となつて、この会の意義深さを感じ、今では我々にとって大切な会になったと思う。厳しい



第23回東部管内組合員交流会

中ではありますが、少しでも気持ちのリセットして、今日は楽しんで「歓迎の挨拶を述べられた。岩竹重城組合長（広酪）からは「酪農情勢は昨

年より変わってはいませんが、乳価は四月から三円の値上げになる。今はとにかく一円を大切にする経営をして欲しい」と述べられた。



交流会の開宴にあたり、木原正勝社長（山陽乳業（株））が日頃の感謝と会社経営の状況等を報告して、グラスに注がれた牛乳を片手に乾杯発声が行われた。参加者は美味しい料理とお酒を酌み交わしながら、和やかな雰囲気の中で、司会の内海さんが地元世羅町の手品同好会にお願いして招いた三名のアトラクションが披露された。数々の手品で会は大変盛り上がり、司会者から同好会の方に「酪農に対して何か質問がありますか？」の問いかけに「酪農の『酪』と言う部首読みは？」との質問があり、誰もが答えられず、岩竹組合長が「酪農家はよう酒を飲むと言うことではなからうか」と答えられ、会場は大爆笑の渦に包まれた。楽しい時間は早いもので閉会時間が近づき、次回の開催地・福山地方酪農協議会を代表し淵上増廣さんの万歳三唱で次の再会を約束し散会した。こうして二十三回の回数を重ねる組合員交流会が、未永く続くことを祈っている。

慰霊祭・牛を大切にしたい飼養管理 女性部・手芸で干支の壁掛け

三原市酪農振興会（会長 新舎和久）は慰霊祭を行い、関係機関九名、酪農家十三名が出席した。

新舎会長からは慰霊の言葉が読み上げられ、続いて、三原市長（代読）からは、農家経済・地域農業の発展への労いと、乳製品を通して我々の健康に寄与してくれた事への感謝の言葉が述べられた。地元住職による佛説阿弥陀経が唱えられ、出席者の焼香を行い、法話では、阿弥陀様の由来についての話があった。



新舎会長は、「こうして関係機関を交えての慰霊祭ができ、この日を大切に思い、牛への感謝を大切にしましょう。また、先日の広酪の座談会でも厳しい声を聞いたが、それは乳が出ていないからだ。牛の飼養管理や暑さに向けての暑熱対策をして、牛を大切にしよう」と挨拶された。

来賓代表挨拶では、鈴木道弘専務（広酪）より、「我々は牛の死に必ず直面する。牛に関わって

く中で、私は感謝の声をかけている。組合職員にも頼られる職員になるよう伝えていくが、厳しい状況の中で、協力の精神を糧にして乗り切つて戴きたい」と挨拶した。

その後、昼食会では東部畜産事務所、山陽乳業（株）、府中家畜診療所長、三原農協など、各関係機関から伝達事項の説明があった。慰霊祭終了後は女性部の集會が行われ、手芸の依頼を受け嗜好美子所長（東部事業所）が講師となつて、今年の干支「羊」の壁掛けと一緒に作ることを提案し、簡単な布遊びでも指先を使うことで普段とは違う気分転換が味わえ、出来上がった作品に皆さんの笑顔が見え、楽しい一時を共に過ごすことが出来た。



出生 24 時間を逃すと後はない!! 全酪連「酪農セミナー 2015」

全酪連主催の「酪農セミナー 2015」が開催され、酪農家、関係団体から 150 名の参加があった。広酪からは竹ノ内寛治係長、大島達夫係長、河野洋一職員(事業推進課)の 3 名が参加した。

講師は、ボブ・ジェームス博士(バージニア工科大学酪農学部教授)で「哺育・育成牛、移行期牛の管理~研究と農場を結びつける~」と題しての講演であった。

同氏は生産現場における普及活動に長く貢献され、移行期牛や新生子牛管理の現場で役立つ内容をより現実的な視点で紹介され、特に「出生 24 時間を逃すな!」と繰り返し強調された。

講演内容は、以下の 4 項目に振り分けられ、この内主な内容を紹介する。

広酪では組合員 2 名の参加があり、セミナー終了後「早速 3 回哺乳を実践してみたい」とやる気満々の姿勢を伺えた。



■講演のポイント

① 牛の健康と哺育子牛への影響	(研究 1) 乾乳牛を「冷却する」・「しない」の試験結果	
	冷却する場合は	①必ず乳量がアップする結果となった。 ②産まれてきた子牛は、初乳IgG(免疫グロブリン)の吸収率が高かった。 ③子牛の生体体重は大きく、そのため健康で発育もよい。
② シメンツトのマネー	(研究 2) 乾乳中エネルギーを 100~130%の充足率で、分娩後同じ飼料としてどうなるかを検証	
		① 130%でも濃厚飼料が多いためか、よく食べ、産むまでの影響はなかった。 ② 130%の牛は分娩前の乾物摂取量の落ちる割合が一番大きかった。 ③カウコンフォートの影響か、有意差はなく、想定外の結果であった。 ④「太らせて良い」という結果ではない。
③ 離乳前子牛の栄養管理	■出生 24 時間を逃すと後はない。	
	初乳の給与	①初回は生後 6 時間以内、12 時間以内に 4 リットル ②IgG が 50g/ℓ 以上、細菌数 10 万/ml 未満
④ 育成牛の飼養管理	初乳給与の注意点	①子牛への微生物進入は、進入後一気に増殖。 ②綺麗な環境下で分娩をさせてやるのが大事。 ③子牛は免疫が吸収し易いようになっている。 ④大腸菌が口に先に入ると、免疫吸収を阻害する。 ⑤初乳を取り扱う機器も衛生管理が必要。
	③ 離乳前子牛の栄養管理	
	①望ましい発育とは?	・生後 56 日までに体重を 2~3 倍まで発育させること。(0.5 ~ 1.0kg/日)
	②同じ量を 2 回哺乳、3 回哺乳で比較	・体重増加の違いなどの有意差が見られた。 ・2 回哺乳では、泌乳までに何らかの事故が起こる可能性があり、3 回哺乳より多いデータが示された。
	③販売不可能乳	・経済的にはプラスにはならないため、リスク管理が必要。 ・品質、量の変動、細菌数、バイオセキュリティの問題あり。 ・「カーフトップ ZERO」を紹介された。(全乳、全脂粉乳を併用する哺育を前提に開発)
④ 育成牛の飼養管理	④自動哺乳機	・ミルクの 1 日あたりの給与量は、固形分として 680~1,264g/日を給与。
	⑤離乳	・移行期間はストレスがかかる時期なので、4 日から 10 日かけて離乳する事を推奨。
	■育成牛の飼養管理	
	①離乳	・食餌の移行によりルーメンが発達(液状から固形飼料へ) ・伝統的な子牛管理法における社会的環境性の移行(個別から群管理へ) ・早期より群飼育に持っていくことで、採食行動が増す。
	②目標発育システム	・自分の牛群の成熟体重を知る事が大事。その体重の 55% で種付けをする。 ・バイパス蛋白濃度の試験では 43% が適正と言え、それ以上だと不経済。 ・春期発動としての付加価値分はあっても良い。
③飼料給与管理		・4~5 ヶ月齢、サイレージは利用できない。6 ヶ月以上から開始。 ・基本的には 5 つのグループに分けることが推奨される。 グループ 1: 離乳後の群 1 群(4~10 頭) グループ 2: 育成用飼料と乾草 グループ 3: 授精時期育成牛 グループ 4: 授精開始 1~2 ヶ月前にグループ 4 に入れる。妊鑑+となるまで グループ 5: その他 ・きめ細やかな管理をもっとも必要としない時期 ・食べただけ食べさせても過肥にならない「低エネルギー飼料」